

# 卷頭言

## 子どもと大人の「共生」を考える

### — 身体性の視点

根ヶ山光一

子どもには、未熟で非力というイメージがあります。無力な子ども像は、大人による保護や導きを必要とする子ども像でもあります。最近の子どもをめぐる事件、事故の報道などを見ると、そういった子ども像が強まっているような気がします。

子どもが母親のお腹の中で育つ時、母親はしばらくの間その存在に気づきもしません。それにもかかわらず、母体と子どもの身体の間では、ある種の「コミュニケーション」がとり交わされ、子宮壁への着床、胎盤の形成とそれに続く栄養や酸素の受け渡しなどがなされます。また、出産や哺乳についても、そこには免疫、代謝や生理的仕組みが複雑にかかわっていて、そのお陰で子どもが円滑に発育します。そこで大事なことは、その身体の関係性において、子どもも親と対等な役割を担っているということです。

子どもは確かに、ある意味未熟で大人の助けを必要としています。しかし考え方を変えれば、子どもは自らの生存のために、そのような大人を操作してその資源を引き出す絶大な「能力」をもっている存在であるともいえます。大人に受動的に育ててもらおう存



在ではなく、大人に能動的に働きかけ、大人に資源を注がせる存在として子どもを見る  
ことができます。しかも大人は、嫌々ではなく喜んでその資源を提供するのです。大人  
と子どもの「共生」関係とは、そういう対等性をさして言っています。その対等性の基  
盤として身体性があるということなのです。

子どもが大人から資源やかかわりを引き出す能力を全身にたたえているということ  
は、見方を変えれば、子どもが大人の育児行動の「教師」であり「ガイド」であるとい  
うことです。子どもの身体に備わった力がそれを導いているのです。たとえば、「抱き」  
を考えてみましょう。親が独力で赤ちゃんを抱いてあげていると思っっているかもしれま  
せんが、実は赤ちゃんもその手、足、頭、胴体を使って全身で能動的に「抱き」に参加  
しています。子どもの身体が親から適切な抱き行動を引き出し出している、とすらいえます。  
「哺乳」もしかりで、赤ちゃんが吸うこととおっぱいの出が促されるのです。

進化に裏打ちされた身体に導かれて子どもは要求を出し、外部からのかかわりを拒  
んだり受け入れたりします。それが結果として子育ての方向性をガイドしていることにな  
り、親はそれに導かれて世話をしていきます。これがイヌやネコなどがしている子育て  
の実態です。身体に注目することは、発達が生物学によって下支えされている、とい  
う事実を自覚することでもあります。発達とは、「繁殖」という生物学的現象の心理学的  
翻訳なのです。

ところが人間は、「頭」で子育てするほうにシフトし過ぎてしまいました。親は子ど



もという最も信頼性の高い「テキスト」を横に置いておいて、文字どおりの「育児書」や「医師のアドバイス」などに頼り過ぎてはいないでしょうか？　そこではしばしば、「愛」や「きずな」の大切さが訴えられます。愛とは、関係の心理的側面です。発達心理学でよく言われる「意図」の理解や「心の理論」も心理面に關すること、それは年月の経過を伴う子どもの成長に応じて発達してくるとされています。そこには、未熟から成熟へ、といった上昇的な方向性が想定されています。未熟な子どもが、成熟した大人に導かれ発達を遂げていく、というイメージです。ここにはまた、リーダーとしての親、というイメージも同時に存在しています。それは西洋の個人主義と相性のいい考え方のように思われます。

しかし、子どもの身体にたたえられている生物性は本来自己主張的ですし、親の身体にある生物性と対等な相補的關係にあります。子どもの身体は、大人といい關係を形成すべく、「かわいらしさ」「肌触りのよさ」「いいにおい」などの訴求力を備えています。さらに、どういう触れられ方や味、においを好むかなど、身体が求めるものにも志向性があります。大人の側も、そのような訴求性や志向性に応えるように仕組まれています。生きるための能力として、子どもの關係構築力は大人よりはるかに有能、雄弁だと思えます。このような視点は、西洋の個人主義的な育児観よりも、日本で伝統的に受け継がれてきた、子どもの主体性を尊重する育児になじむとらえ方なのではないでしょうか。

身体はまた、「だるい―元気な」「眠い―覚醒した」「空腹な―満腹した」といったよ



うに絶えず揺らいでいる存在でもあり、子育てとは、親と子どもの揺らぎ合うアナログな二つの身体の出会いです。そのファジーな身体性を認めることは、子育てにおいて大らかさ、波や揺らぎの許容を意味するでしょう。それも、身体に注目することで見えてくることです。

さらに、身体性のもう一つの特徴は「反発性」です。たとえば、身体には免疫機能というものがあって、それは身体的な自己識別機構なのです。心が自己を識別するはるかに前に、受精した瞬間から始まる自己分化の問題です。その後の出産も、また離乳も、親子の身体が利害が矛盾するために生じる反発性であるということが出来ます。つまり身体は、親和性と共に反発性の源でもあり、親子といえども親和・反発の両方が共存する「ヤマアラシのジレンマ」の関係なのです。私は長年にわたって、親子間の反発性を「子別れ」という切り口から見つめてきており、実はそれが親子の対等な共生関係には必要不可欠な要素であると痛感しているところです。

子どもの主体性を認めて反発性を視野に入れると、それによる親子の相互尊重性が浮かび上がってきます。そのような親子観は、暴力や過保護など、昨今の親子に指摘される問題解決に対する一つの糸口になるのではないのでしょうか。愛だけしか見ないで反発性が生む相互調整過程を無視する「美しい」親子関係像からは、真の「共生」にはたどり着けないと思っています。

(早稲田大学人間科学学術院教授)